広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	山口県文書館蔵「近藤芳樹日記」翻刻（十七）
Author(s)	久保田，啓一
Citation	内海文化研究紀要 , 51 : 15 - 27
Issue Date	2023-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/53879
URL	https://doi.org/10.15027/53879
Right	Copyright (c) 2023 by Author
Relation	

山口県文書館蔵「近藤芳樹日記」翻刻（十七）

久保田　啓一

凡　例

一　漢字は、常用漢字に含まれるものはそれを用い、他は正字体とした。ただし、「并」のように、組版の都合を考慮して俗字を使用した場合がある。また、明らかな誤字は訂正した。

一　平仮名・片仮名については、書き分けに意味があると考えられるため、底本の表記に従うのを原則とした。平仮名の文脈中にあらわれる「ニ」「ハ」「ミ」もそのままとした。なお、合字の「ヿ」やメなどは、それぞれ「コト」「シテ」などに開いた。

一　適宜句読点・濁点・半濁点・中黒を補った。

一　漢文の訓点は、明らかな誤りを正した以外は底本のままとし、新たに補うことはしなかった。

一　踊り字は、〻を「々」とした他は底本通りとした。

一　校訂者による注記は、〈表紙〉のように〈　〉で示し、底本に使用される（　）とは区別した。

一　欄外や行間の補記、割注の類は、〈欄外〉〔○○○○〕・〈傍注〉〔○○○○〕・〈割注〉〔○○○○〕のように〔　〕で括り、底本に使用される「　」とは区別した。

一　底本の行移りには従わず、内容に応じて適宜改行した。また、改頁を示すことはしなかった。

一　闕字・台頭・平出の類は無視した。

一　日付・天候の記述から本文に移る形式は冊によって異なり、統一がとられていないが、日付・天候を一字下げで書き始め、本文を続ける形式に統一した。

一　通読と検索の便を考え、各冊の最初と最後には〈第○冊　表紙〉〈以上　第○冊〉と校訂者注記を掲げ、各月の初めには〈文政九年〉のように該当年を注記した。

一　全冊の本文掲載終了後、索引を付す予定である。

〈承前〉

〈扉〉

付紙

十七　〈割書〉〔自安政三年八月一日、至同年十二月七日〕

安政三辰

雲石日記

八月一日吉

〈本文〉

八月〈安政三年〉一日。晴。

鶏鳴よりたちて、宮市なる小倉種信が亭に立より、船橋を渡り、右のかたにをれて右田の館のまへを過、岸見の御坂社、また二宮出雲社を遥拝して、川をひがしにわたり、堀村にいこふ。荒瀬善太郎を同伴なり。それより立出て道にてゆふ立にあふ。くれんとする比、小原の紺やにやどりぬ。奇麗なる家也。出雲社のまへを過とてよめる、

（マヽ）

二日。晴。

払暁に小原の紺やを立て徳佐市の石見屋にいこふ。それより馬をかりて両人の荷物を負せ出たるに、夕立はげしくす。野坂をこすほどにはれぬ。津和野におりて高津やといふ逆旅にやどる。此所をとゝしの四月丙丁の災にかゝりて、城下の家ことゞ〳〵く焼たり。それゆゑ何事も不便利なり。逆旅もいとそまつなる家なり。

三日。晴。

払暁に津和野をたつ。青原にて憩ひて、こゝより舟をかりて横田川をくだる。借切一貫二百文也。津和野より青原三里半、青原より高津へ三里半なり。午時ばかりに高津につきぬ。柿本社をバ遥拝してすぐに東岸におり、それより野中の道を過て益田川の末舟わたし也。百姓わたしなるよしにて渡賃壱分づゝ也。それより浜辺を過て津田の茶店にいこひ、こゝにて葛湯をたうべ、からうじてかまてといふ処につきぬ。津田よりすべて山道也。かまての小松やにやどりぬ。

四日。晴。

夜の内より出たちて、山道をのミのぼりくだりす。一里あまり来て夜あけぬ。それより三隅をすぎ、また山道〈補入〉〔のミ〕を二里半ばかり来て、おり江といふ処のあづまやといふに憩ひ、漬物類を出せるを茶にして昼餉いさゝかたうべぬ。されどまだ四ツ時にもならぬほどなれバ、大かたにしてこゝを過て、周布にてまことの昼餉をたうべ、湯あミなどして午睡す。こゝより荷物を馬に負せ、荒瀬ハこれにのれり。予しばらくいこひて、かごにて出たちぬ。申の下尅ばかりに浜田の宇野市といふ逆旅にやどりぬ。けふのあつさ、まことにたへがたし。

五日。晴。

払暁にたちて、山間の近道を、あないするものゝあるにいざなはれてすぎぬ。下郷に出て、それより浜田より三里来て、はしの浜を過ぬ。砂道いとくるし。このわたり浜田領なり。はし浜より二里来て郷津にて昼餉たうべぬ。こゝハ御料所にてやゝ賑ハへり。郷川をわたりて御料所をすぎゝぬるに、家ゐのさまども、おなじ田舎のかやぶきながら、潤へるやうにおもハれ、はたこゝかしこ瓦屋おほく、蔵長屋などもうるハしくしたる所々多し。日くれて後湯津につきぬ。家二百軒ばかりもある処にて賑ハへる里也。井筒やにやどり、やがて湯に行てかへりてふしぬ。

六日。晴。

湯津を払暁にたちて半道ばかり来たるに、坂のうへに大森五百らかんなどへのわかれ道あり。おのれらハその道を左のかたへ行て、磯前といふ里にて出店の勘二郎といふものゝ店にて昼餉たうぶ。あるじ少しハ茶をこのむと見えて、鉄瓶（ムシ）尾焼などももてり。こゝを立て来る道に浄円寺とかいひて大きなる一向宗の寺あり。よき寺なり。こゝを過て湖水の如き入江あり。奥より川水流れいでゝよどみをなし、やがて浜に出るなり。その水の落るロハ両方砂山の中を切たる如き所にて橋あり。橋の下に簀を立わたしたるハ、川魚を海におとさじとの用意なるべし。こゝより四五丁来て羽根也。水間ヤといふ後家ぐらしの内也。この後家さる者とミゆ。くれんとするほどに着ぬ。こゝにて状とゝのへて大田の幸田三四郎がもとにつかハす。三四郎家号を備前やといふ。

七日。晴。

明ぬ内にこゝを立て、多岐をすぎ、久むらをへ、三里浜にかゝりぬ。中ほどに流水ながるゝ小川あり。このおくに小湖ありてそれより流るゝと也。九ツ時ばかりに杵築につきぬ。杵築の手前に川あり。歩行わたり也。杵築にて登橋ヤ文右エ門といふ宿にて昼餉たうべて、富永多計知方に人遣ハしたれど、けふあす御祭事にて物いはるべくもあらず。登はしヤもきたなき家にてとゞまるべくもなけれバ、いかゞハせんとおもひわづらへるをりしも、松江人にあへりしかバ、これにかたらふに、さおぼさバおのれこれより日のミさきの近辺なるウレウといふ湊まで行はべり、そこに坂根やといふ逆旅あり、こゝハ少しハ静かなるべし、かしこへ御供つかまつらんといふ。これに従て杵築を出、大宮をもをがまで、まづかなたへ向へるに、いと大きなる山坂にて二

里ほどの道なれバ困じはてぬ。一里あまり来て清水のながるゝ処あり。こたびの旅中にてかばかりの水にいまだあハず。いとうれしくて手あらひ口そゝぎなどして、活かへりたる心ちして、暮過る比坂根やにつきたるに、こゝにも杵築まうでの人あまたやどりたれど、隠居のかた六畳ばかりあるを払ひあけさせてやどりぬ。ミなかの松江人の周旋によれり。

八日。晴。

朝餉たうべて後、善太郎ハ源と忠とを率て船より杵築にまうでつ。今日富の札突くるなるによりて、そをミんとてなり。この松江人も行たり。おのれ一人のこり、終日打臥し、按摩などよびて労れをもませたりき。あるじの女に仰せて汁粉など調させたり。

九日。晴、申時比より雨。

朝とく日の御崎にまうでつ。本社ハ天照大御神、上ナル社ハ素盞嗚尊ナリトゾ。宇竜ヨリ八丁アリ。ソノ通に鎌倉ヨリノ禁制ノ写シヲ札ニ記シテ建タリ。武蔵守・相模守トアリ。

御崎よりかへりて朝餉たうべて杵築に出たり。杉谷左大夫が家をやどゝせり。ほどなく富永多計知〈割書〉〔芳久〕出来れり。また佐々鉄之丞易直とひ来たれり。わかき者ながらをとなしき男なり。くれて後、芳久またミづから著ハせる出雲名所集・風土記等をもて来たり。

十日。雨。

朝とく御社にまうづ

広前の岩間の水を百結び八十むすびしつ身をきよむとて

旅亭にてよめる

秋風は松にこゑする琴引バいづれのをともしらぬものから

琴引やいづれなるらん松風ハ山のをゝとになべてこゑする

タヅケテ佐々鉄之丞并ニ赤塚左京進〈右小書〉〔澄景〕・白石淡路〈右小書〉〔元重〕等来ル。クレテ後、富永芳久、出雲ノ古図等ヲモテ来ル。今日亭主ヨリ白羊羹ヲ出セリ。美味ナリ。

十一日。曇時々雷鳴。

飯後御社ニマウヅ。八足門ヲ入テ楼門ノ楼上ヨリ拝ス。楼上ヨリ拝シテ御殿ノ御椽通ニアタル御殿ノ作リサマ

六間四面

階十五　惣高八丈、床高一丈二尺

カクノ如ク階間ハ南向也。神ハ西面ニシズマリマス故ニ、社役ノ者御殿ノ内ニ入ルトキハ、マヅ北面シテ階ヲ上リ、左ニ折レ西面シテ歩ミ、右ニ折レ北面シテスヽミ、マタ右ニ折レ東面シテ神前ニムカフ也。ソレヨリ玉垣ノ内ヲメグリ帰宿ス。主人ニキク、御造営ノ御材木ハ、但馬ノ妙見山ヲ御引当ナリトゾ。

日ノ御崎ノコトヲ芳久ニ聞ク。モト大社ノ末社ニテ、至テ小社、更ニ大社ニハアラザリシヲ、法印某トイフモノ、林道春ノ次子ニテ、江戸ニ居シホドニイロ〳〵ト調査シテ、大社ヲ天日隅宮トイフニマネ、天日沈（シヅミ）宮ナルヨシヲツクリ言シ、伊勢ノ宮ヨリ日神上ラセ玉ヒ、コノ海ノ西ニ日神沈ミ玉フ故ニ日沈宮トイフトイヒ立シテ、当社ヲハナレ公義ノ御作事ニナシ玉ハリテ、カクノ如ク大ナルカマヘニハシタリトナリ。然レドモソノ時キリノコトニテ、常典ナラザルユヱニ、ソノ後シカラズ。松江侯ヨリ御取繕ヒトナレリ。検校トイフモノモワケノワカラヌ物ナリトゾ。今日秦主殿トテ、オノレムカシ難波ニ居タリシホド、物学ビニ来居タリケルガ、国ニカヘレル時モ従ヒ下リナドシテ志フカヽリシ者、久シフ音信ヲモタエタリケルニ、杵築ヨリ二里バカリ近在ニテ今市トイフ所ニ近キ八幡宮ノ祠官ナリケレバ、コタビ聞ツケテヤガテ来リヌ。マタ田中清年〈割書〉〔数馬〕来ル。コヽニテハ、コトヨクイヒトホレル人トミユ。

十二日。晴。

今日未時バカリヨリ千家国造ニ対顔ス。一応ノ礼至テ恭々シク、マヅハ公卿トモイフベキサマ也。サルハ松江ヨリノ御アヒシラヒハ至テ卑ク、マタ古ヘヲオモフニモ国造ノ身ノ上オヨソ知レタル者ナレドモ、サスガニ天穂日命ノ血統ニテ神系正シク、今世ニテハ類ヒナキ家柄ナ

レバ、カヽルモ理也。サテ奥坐敷ヘ招カレテ職員令神祇官条ヲ講ジ、サテ後クルヽマデ雅談ニ及ベリ。尊孫主、今年六十ナルヨシニテ、コノ国ノ名所ドモヲ題ニテ歌集メラルヽヨシニテ、オノレニモトコハレケレバ、

沖とほく杵築の海を見わたせバ君がちとせもあまりありけり

今日カク招カレテコトカタラセコトヲヨロコビテ、マタヨメル

むら雲を四方にあらしのはらひ橋わたりてあふぐ月のさやけさ

日クレテ後、饗応アリテ旅亭ニカヘリヌ。富永芳久来訪。

十三日。晴。

朝田中清年来ル。今北島国造ヘマネカル。大祓ヲ講ズ。

亀山の岩根にはへる霜つゞらしげりさかえて千代をへなゝん

まがことをよそにへだてゝ八重がきのうらやすらけく君やますらん

千家ニテ相対ノ人々

尊孫君　平岡主殿

尊澄　島兵庫重老

御嫡孫国丸君　長谷川美織

取次　高木瀬織

北島家ニテ

全孝君（タケノリ）　佐草尚書

修孝君（ヤス）　北島美濃

内孝君（ウチ）　北川右門

取次　荏田帯刀

○杵築赤塚村矢田素兵衛方ニ吉田在城日記アリ。国造家ヨリ毛利家ヘノ人質トシテ来レルモノヽ日記也。

十四日。晴。

海辺月

わたの原かたぶく月をつなにさし引かへさばやそのゝ長浜

何クレト支度シテ巳ノ時バカリニ出立。善太郎ハ町ハズレノ川堤ヨリ北ヘクダリテ来リシ道ニオモムク。オノレハ富永多計知芳久ニオクラレテ塩冶邑ノ八幡宮祠官秦主殿亭ニ至ル。杵築ノ里ハヅレナル松原マデ、宿ノ主人杉谷左大夫悴寿之助ト田中数馬清年ト両人送リニ来ル。ソレヨリ多計知ト共ニユク。ソノ間ミナ平地、東ヲ望ムニ沃野千里、杵築マデ山ナシ。但ソノ間湖水ナリ。塩谷村ニ至ル。今夜月清シ。

杉谷左太夫方ニ預ケ置候荷物　花生箱一　花碗（マヽ）箱一　□〈字形不明〉白□〈字形不明〉紙二包　小冊書一包　〆三包　一所ニシテ扇箱一ツ　及ビ短冊少々　以上相預ケ候事。当月末比ニハ三笠ヤまで参り候筈之事。

十五日。曇雨。

田中清年来訪。タヅケテ富永ト共ニカヘル。此里ニ隠者アリ。儒ヲ以テ業トス。ソノ名ヲ宜堂トイフ。易ニクハシ。ソノ注ヲツクレリ。序卦伝祈卦伝等ヲ始メトシ、ヨキ人ナリ。オノレニソノ書ノ序ヲアツラフ。

立こめし雲の八重垣ひまもがなこよひの月のすめるかほミん

いつまでもおもひ出雲の空ならんこよひの月のかゝらざりせバ

十六日。曇。

今日諸所ヨリアツラヘシ物ドモヲ認ム。夜フケテ雨少シフル。今夜広道・諸平ヘノ状ヲ認メ、富永多計知ニタノム。

十七日。曇。

朝塩冶ヲタツ。宜堂并ニ淡路両人、一二丁バカリ送リ来ル。久ムラニテ中食、ソレヨリ少シバカリ来テ、小田ト云所ニテ山道ノ案内者ヲヤトヒ〈傍記〉〔百三十文〕、鍋谷トイフヲヘテ、田儀邑ノ宮本ノ桜井運右エ門ヲ訪フ。宜堂ガ添書ニヨリテ也。マコトニ山中ナガラ家居ナドモ奇麗ナリ。鉄山ヲスル者ナリトゾ。夕飯美味、山中ノコヽチセズ。茶菓ナドモイトヨシ。白羊羹ハ松江製ナルヨシ。甚美味也。

十八日。晴。

午後桜井氏ヲタツ。山中ニ居ヲ占タル大家ナリ。春海舎トイフ。午前伊セ神楽来リテイトサワガシ。羽根ノ湖辺ニ出テ、ソレヨリ左ヘヲ

レ、山道ヲ二里バカリ来テ大田邑ナリ。幸田三四郎ガ亭ニトマル。アルジサイツコロヨリ待受タルヨシニテ、イトヨロコビテアルジス。今日産土神祭礼。十四五日ナルガ雨天ユヱニ延引セリ。地踊アリ。源蔵ヲミニツカハス。此家ニ西条四日市ノ僧鵡石庵〈傍記〉〔勇哲〕寓ス。書画ヲスキテ諸名家ノ小紙切アマタモテリ。ソノ僧ノ話ニ、光沢僧正ノウタ、

夏月如霞

月かげの霜とミゆるや草むらに虫のねいそぐはじめなるらん

十九日。雨。

夜の明ぬ内ヨリフリ出タリ。終ニヒマナクフレリ。春臣ヨメル、

おもほえずきませる君にくらぶれバはつかりがねハものゝ数かハ

廿日。暗曇不定。

大願寺隠居来訪。墨一箱ヲ持参。此僧有馬春庵ノ兄也。耳聾セリ。十八九年已前、紅葉屋敷ニテアヘリシ由ヲイフ。医者福間三友来訪。主人ノ話ニ、南村八幡宮ニ鉄塔アリ。鉄塔ノ下石櫃ニ経筒アマタアリ。ソノ筒ノ年号ニ、天喜〈傍記〉〔コレ間違ナリ。下ニイヘリ〕等ノ年号アリシトゾ。凡六十バカリアリシトナリ。マタ岸本左一郎ノ話ニ、尾路ノ向ヒ瀬戸田島ノ寺ニ鐘アリ。小早川公ノ寄附。ソノ銘ニ、後世モシ乱世ナドノ時ハ、コレヲ鋳換テ鉄炮トセヨトアリ、トイヘリ。尾路ヘ問ニツカハスベキコト。羽根ノ長福寺ニ元就公ノ御陣羽織アリ〈傍記〉〔ケサニセヨトテ玉ヘルヨシ。今五条ノケサニナレリ〕。マタ古文書アリ。八丁四方毛利家ヨリ御恵地ナリトゾ。

廿一日。晴。

主人并ニ主人之弟及勇哲僧同伴ニテ、午後近辺遊行。八幡宮ニテ鉄塔ヲミル。永喜十一年トイフ経筒アリ。永喜ノ号可怪。大永ノ年号モミユ。コノ経筒ミナ鉄塔ノ内ニアリシモノナリ。拝殿ニテ小酌、ソレヨリ大願寺ニ詣ヅ。浄土宗也。隠居ハ国人ニテ有馬春〈傍記〉〔青力〕庵ノ弟也。ソレヨリ天満宮ニマウデヽカヘリヌ。今夜キク、一昨年当国野鹿ノ害マコトニ希有ノ珍事也。御料地ノミニテ取イタル鹿十六万余ナリ。コレモソレ限リニハアラズ。ソノ後モマタアマタ取タリトゾ。常鹿ヨリハ大ナル形ニテ、田園ヲミナ食アラセリトゾ。昨年ノ春終ニトリヲハレリトナリ。

廿二日。晴。

无事。常見寺ノ住持真乗訪ヒ来ル。コノ寺ノ先住スナハチ凌空ナリ。凌空サイツトシニ死セリトゾ。住持菓子料持参シテ歌ヲミセタリ。天満宮ノ別当ヨリモ菓子ヲ贈レリ。コレハ病気ニテエ来ラズ。

廿三日。曇。

朝ノホドヨリ大願寺隠居来ル。中食終テカヘル。マタ大願寺和尚菓子ヲタヅサヘ来ル。マタ天満宮ノ別当モ来ル。

待月

まてバこそ出るもおそきこゝちすれとおもへど月にむかふ山のは

夕秋風

いくとせかおなじ秋かぜ身にしめて月まつ袖の露かこつらん

今夜天満宮ニて地踊アリ。亭主ソノ外来リテ払暁ニカヘレリ。故ニミナ朝寐ナリ。余ト勇哲師ノミ早起。

廿四日。晴。

鳥井村ノ宮脇清之介〈割書〉〔戎屋トイフ〕来訪セリ。羹一箱ヲ束修トス。本居翁ノ、岡田頼母ノ祖母ノ九十ヲ祝セル長歌ノ掛持ヲ持参。ソノ後諏訪社ニマウヅ。草臣ノ舎弟ヨリ食籠ヲ持参。ソノ所ヘ静間村ノ梶野〈字形不明の字の右に「野」と補記〉純吉来訪〈割書〉〔中屋ト号ス〕。夜フクルマデ物談ジテカヘレリ。今夜天満宮ニテ地踊アリ。

廿五日。曇、申時ヨリ大雨。

無事ナリ。芥川報讐記ヲカキ畢ル。

廿六日。晴。

アルジノ草臣及勇哲僧ヲトモナヒテ、鳥井村ノ宮脇清之介ガ許ニユク。饗ネンゴロナリ。朱鑑口〈字形不明〉ノ不二ノ記并ニ画ヲミル。コレトイヘドモ長崎通商ノ唐人ミルニタル物ニアラズ。ソノ他論ニカヽルモノナシ。タヾ蘆雪ノ水鳥抜出テミユ。庭ニ玉松アリ。コレガ

歌ヲコフ。
しげりそふ枝を緒にしてつらぬける玉松ミれバあやにめづらし
暮テ後カヘル。帰路大田川ノ堤水ノ音幽閑旅懐ヲ催セリ。
庭菊
霜ふれどわたをもきせぬわび人の庭のしらぎくなほにほふなり
廿七日。晴。
廿八日。曇。
伯州ノ産ニテ青木ノ弟子ノ医師足羽深堂来訪。雲哲師(ママ)ニキク、吉野上市沢井清右エ門風流家ナリ、尋ヌベシ、魚屋トイフ。河内ノ松原在今米邑中九兵衛マタ尋ヌベシ、勇哲師ヨリ言ツカハシオカント也。
広瀬の永田氏鑓ゆるされたるよろこび
今よりハそともの岡のほこ杉も君がかきねをうらやミやせん
今ぞしる庭のほこ杉千代かけてさかゑんやどのしるしなりとハ
亀
やかねども亀にすぐろハよろづ代の家のためとぞうらに出ぬる
雁
夜もすがら霜になく雁やどかさむわがかどつ田ハよしせばくとも
今日当家ニテ会セントテソノ催アリシニ、中野ヤトイフ草臣ノ舎弟中野又五郎文信ガ妻久病ナリシガ、此節ハヤヽヨロシトテ悦ビシガ、俄カニ死セリシカバ、会モムナシクナリヌ。
廿九日。晴。
今日中野ノ妻葬式ナリ。喪中ニ居ンコト、家ハ違ヘドモイカヾニ付、諸方ノ認メモノ等今日出精シテ書ケリ。勇哲僧ヲイザナヒテ明日静間ノ梶野マデユカントテ也。
晦日。晴。
勇哲師ヲ伴ヒテ梶野氏ニ至ル。山中ノ大家也。主人馳走丁寧也。
大伴金村
いさをさへ高くミせけりすべらきの御代もつゞきの宮の棟木ハ
梶野氏家園の図に題す
たゝなハるそともの山を友にしてさがしき世をやよそに見るらん
草臣ヨリ為恭へ嘱ノ二幅対、左ハ七草、右ハ覚エズ。
九月〈安政三年〉一日。曇。日蝕也。後雨也。
梶野氏ヨリ為恭へ三幅対ヲタノム。
中ハ、仁明ノ承和十二年ニ尾張浜主長寿楽ヲ舞フ図、清涼殿前ニ於て也。
左　春くれバやどにまづさく梅の花君が千とせのかざしとぞ見る　貫之
右　松(ママ)風のふきあげにたてるしの原(ママ)ハ花かあらぬか波のよする　か　菅公
コヨリ〈傍記〉〔紙〕細工ノ図、ウヘ黒ぬりノ分、梶野ヘオクルベキコト。拙ガヨリハ一マハリ大キナル分。
九ツ時静間より大田ヘカヘル。恒松与吉郎来訪。マタ出構(デカモ)八右エ門菓子料ヲ以テ来訪。
雁
そとも〈傍記〉〔かきつ〕田のいねの穂つミにおるゝ雁にくき物から声のかなしき
未時後亭主暇乞之饗アリ。相伴福田宜三郎・足羽深堂ノ両人ナリ。昨日ヨリノアレニ肴ナキヨシナリ。マヅ団子ノ雑煮、金糸タマゴ、小ホロカマボコ等、次ニ吸物、セモノ也。硯蓋、巻タマゴ、白カマボコ、次ニ鮎ノ焼物、次ニサシ身、次ニタコ、次ニヒタシモノ、次ニ本膳、シル大根、血附鯉ノホソ作リ〈小書〉〔イリ酒〕、菓子椀〈小書〉〔山ノイモ〕、イリコ青ミ〈割書〉〔口〈字形不明〉ウマ〕、猪口、ハスノ梅肉アヘ、茶碗蒸〈小書〉〔何ニカアラン〕、鳥キクラゲ、イモ等也。然シテウス茶、ジヨ饅頭ナリ。
二日。雨。
今日出立セントス。
おのれをとゞめんとて草臣のよめる

海の上も山路もあらし石見がたかにもかくにも君をとゞめん

返し

しかりとてたびにばかりもすぐされじがうなにおなじわが身なれども

梶野ニテ数々書画ヲミル。草臣亭ニテモ数々ミル。ソノ内景文尉ト姥至テ大木ノ横タハレルモトニ居る也。マタ福田宜三郎ガモタル応挙之鯉ヲミル。好也。今朝梶野純吉郎暇乞トシテ来ル。出立ヲ見送ル人、宿ノ忰竹吉及福田宜三郎・足羽深堂及大願寺隠居（マヽ）トイフ医者ナリ。コノ医者ノ生々堂記書ベキコトヲ承引ス。梶野ハ一里余モオクリニ来タリ。志フカシ。一里半ホド来テ久里村トイフ小村アリ。コヽヨリ谷間ノ羊腸ニ入ル。マタ一里半ホど来テ大国安井氏ノ亭也。

三日。晴。

安井氏ニ居ス。腹痛ナリ。仍之村医大谷松庵〈割書〉〔壬生ノ井上薩州ノ兄弟、風流家〕トイフモノニミセテ腹薬ス。昼後竜岩ヲミニユキ、石見八幡ニマウヅ。神主大崎菅雄出迎ヘテ、拝殿ニ於テ茶ヲ出ス。シバラクシテ帰路竜岩ノ近辺ナル所ニ氈ヲ敷テ茶菓ヲ出ス。ソレヨリ安井氏ニカヘル。今夜腹痛ニ付ハヤク寐ル。八神社司大崎氏見舞トシテ来ル。アハズ。

四日。晴。

秋月ノ士処山トイフ文人画ヲカク人、宅野ニ居ルヨシニテ訪ヒ来ル。萩ニテムツマジクセシ人ナリ。今日鳥居神職橋田来訪。

竜岩記

石見の国の大訓の郷ハ、四方にむら山立めぐりて、かごかに世はなれたるかたほとりなれど、はやく和名抄に載られ、勅撰集に撰ばれて、名高き所になん。そこなる八幡のかミのしづまりおはします宮のうしろにゆついはむらあり。このいはむらの内山のなかばとおぼゆるほどに、竜のわだかまれるさましたる岩のあるが、あやしきまでよく似たれバ、字をたつ岩とさへよびて、行きの人のめでおどろく所なりとぞ。殊に雨ふる日にハ、おほへる雲間よりそのかしらのほのかにミゆるが、またく画所の名だゝる人々の墨がきもおとるべくおもハれて、旅人などの始めて過る、いミじうおどろくよしになん。おのれもこたび安井ぬしのがりとぶらひて、あるじの翁と共にこのいはほのもとにあそびて、しばし立とゞまりてよめる、

むべしこそあハとおどろけ雨おこす雲もこゝよりたつのいはねハ

五日。晴。

无事。

林下亭記

ひがしおもてをまらうとゐにて、うしろのかたにかごかなる所ひと間ふた間しつらハれたり。こゝの名いかゞつくべからんといはるゝに、おのれふと林下亭ふさハしからんとこたふ。さるハ山のふもとなるいへを林下といはんハ、市の中なるを町屋といふに同じくて、あまりにたゞありたる名なりとしりうごつ人もありなんか。されどそハいたりふかゝらぬかいなでのものこそさもおもハめ。これハ、白楽天のからうたに、林下幽閑気味深とつくれる句によりてつけたるにしあれバ、さらにたゞありあるもじにもあらぬをや。げにかう山かたつける処に、何事もあらぬことなくとゝのへて、おやこはらからむつまじくのどかに月日をすぐさるらんハ、これにまされる楽しびあるべからず。人間の栄耀にほこるなるミやこの人も、このすまゐこそうらやましけれと、かならずいひつべしかし。おのがとぶらひしハ長月のついたちごろなりしかバ、秋のあはれえもいはれぬほどにて、まづかくなんおもひつゞけられし。

とハでやハ山のもみぢも野の花もあかぬながめのおほくにのさと

井戸君嘉恵碑文

井戸君の民をいつくしミ給へりし事どものあとをバ、たれかハし

らざらん。さるをかく石文にゑりおくハ、あだし国人の行かひに目とゞめて千里のをちまでかたりつぎなバ、おのづから遠き境にも聞えむことをこひねがふよりおこれるなるべし。君、享保十六年の春こゝの司に任(マケ)られて十七年に入らせたまへるに、其年しも苗稼虫(イネ)に損ハれて、庶民(アヲヒトクサ)飢に及ばんとせしをうれへ給ひ、何くれとたすくべきわざを見はかりごち給へりける。その後いよゝ政に心をつくして、貧しき者のたづきとならん品もがなと勘へたづね給へりしに、薩摩の国になん、甘藷とて、うゝれバよくしげり、喰へバ味ひすぐれたるもののあるよしを聞出給ひ、これを求て部内にほどこし給へりしより、その種里ごとにミのり盛え、そのかづら年のハにおひつゞきて、今ハいかなる凶年(アンキトシ)に遭ぬとも、うゑにいたるおそりハあらずなんなりにけり。あはれいにしへこの国に跡をとゞめ、童部までも恐ミ敬ふハ、柿本の神にして、その御名言の葉の花に残れり。あハれ今この国に恵をのこして、また童部までもかしこミ敬ふハ、井戸の君にして、その御名はたつものゝ実にのこれり。花と実とことなれど、これより後の千代万代、高角山の木の間の月と共に、いさをの照りかゞやかんほどおもひやるも、いとたふとし。

わせおくてたのミかひなき秋もなほやすくすぐるハたがめぐみぞも

六日。晴。

懐紙短冊等ヲカク。今日大田幸田竹吉来ル。

七日。晴。

竹吉カヘル。金比羅詣スルヨシニ付、広シマ井筒ヤ書ツク。今夕勇哲師カヘリ来ル。

八日。晴。

朝ヨリ八幡ノ神主大崎来ル。未時後勇哲同伴、近辺散歩。禅宗ノ寺ノ山上ニアル海潮山トイフニ登臨。

待宵ノ小侍従ガ跡、八幡桟坊ノ後ニアリ。小侍従、別当幸清ニオモハレテコヽニ住居ノヨシ、玉葉ニミエタリト、八幡本記ニアリ。

仁徳帝

とゞめつる三年のミつきなかりせバかまどのけぶりたえやはてまし

九日。雨。

主人ヨリ予ガ所持ノ通ノ火事笠ヲタノム云々。石州ヘノ便所下関三日(マヽ)月、石見ヤ嘉兵衛。

安井助一郎好敏　同善次郎好謙

今日雨ヲ犯シテ安井氏ヲ立ツ。道松尾淳二郎亭ヘ立寄ル。応挙ノ荘子之図ヲミル。後ロニ屏風アリ。芙蓉ヲカケリ云々。

大雅三幅対、囲碁旁観ノ人アリ。童子二人、上ニ大木アリ。中也。左、山色四時望、湖光一里清。右、石上開仙酌、松間対玉琴。

雨ヤマズ。駕ニノリテ山路ヲ三十丁余ヘテ大森ニ至ル。道ノ中ホドマデ熊谷方ヨリ迎ノ人、袴着一人出セリ。予駕ヨリオリズ。雨天ニ仍テ也。大森ニ着テ、西性寺ノ境内ニ熊谷ガ抱ノ小庵アリ。コレニ着ク。アルジ早速来レリ。黄昏ニ至リテ本家ヘ行テ湯ニ入ル。勇哲師ト予ト両人、主人ト三人、主家ニテ夜食酒宴、湯ニ入テカヘル。碁師岸本左一郎直樹所著ノ活棊新評二冊を持参。左一郎歌ヲモヨクヨメリ。詠草ヲ持参ス。加筆シテツカハス。

十日。晴。

朝当寺ノ住持来ラル。ソノ後熊谷翁来ル。銀山ノ坑中ノ毒気ヲ取ルトテ、永久山、竜源寺山、新横合山、大久保山、新切山ト五ヶ所アリ。コノ内永久山ト新横谷(ママ)ノ坑ノ毒気ヲ除ク。ソノ方通気管口一尺四方ニテ、四百間アリ。継目ハチヤンヲ流シテ洩サヌヤウニカマヘ、口ノ所ヘ一斗ダキノ釜、五升焼ノ釜ヘ薬ヲイレ、焼タテヽ長三間幅八尺ノ袋ヲカケ、ソノ袋ノ左右ニマタ五ツヅヽノ小筥ヲツケ、ソノ口ヲ唐三井ヘクヽリツケ、一度ニマハセバ、ソノ風ニテ薬気ヲ坑中ニ送リ、毒気ヲ消滅サセル也。コレマデ気絶(ケタエ)トテ折々火ヲトボシ坑ニ入タル人、火キエ自ラモ倒レテ気ノ絶セルコトアリ。ミナ毒気也。コレヲ消ス療治

ナリ。コノ毒気ヲ蟄素炭酸瓦斯トイフ也。蟄素瓦斯炭酸瓦斯トイフ。

十一日。晴。

源蔵ヲ静間ノ梶野氏ヘツカハス。三幅対ノ画様ヲ申送ル云々。

延年草（ヨレサウ）トイフモノアリ。蜘蛛香ノコト也。根蜘ノ如クナルユエニ名付。サヒメ山ニアリ。カクノ如ク三葉ノ中ニ花生ジテスグナルモノ也。細末ニシテ粉ニシテ呑ム。コレ俗ニ疝ノ薬トイフ〈頭欄〉〔ゴム二分、アンモニヤ二分、附子〈傍記〉〔三リンヨクセイ也〕　細心二分、利久二分。コノ内蜘蛛香ハハジメ一分位〕云々。朝夕二度ニ用フ。

十二日。晴。

城上神社ニマウヅ。神主橋本伊与守病気ニテエアハズ。ソレヨリ熊谷宅ヘカヘリテ汁粉ヲタウブ。味ヒヨシ。勇哲同伴ナリ。ソレヨリ五百羅漢ニマウヅ。石仏ナリ。石室也。石室中一方ニ石柱四本タツ。石像二百五十ヲオク。ソレヨリミダ〈傍記〉〔（弥陀）〕・観音・勢至三仏ノ室アリ。石碑アリテ、マタ東ニ石柱四本ノ石室、二百五十ノ石像ヲイレタルアリ。マコトニ妙也。ソレヨリカヘリニ金比羅ニマウヅ。

午後大賀覚兵衛祐久来訪。銀山付役三十人〈割書〉〔コレミナ俵ニ三人扶持也〕ノ内ニ組頭勤向取捌トイフモノ也。組頭ハ三十俵ノ役料ユエ、本陣ヲ結ビテ六十表ニ三人扶持也。然ドモ勤向取捌ニテハ三十表ノ役料ハナキ也。組頭トイヘドモ別物ニハアラズ。同ジ役人ノ内ヨリ出ル也。組頭二人、勤向取捌二人也。○福本芳十郎〈小書〉〔興孝〕、コレモ銀山付役人也。○松浦寿三郎茂（シゲル）、コレハ銀山付同心三十人ノ内也〈割書〉〔十五表ニ二人扶持也〕。ソノ下ニ御中間廿三人〈割書〉〔一人扶持ニ八表也〕アリ。

十三日。晴。

午後より松浦氏其外入来。未時バカリ本家ヘ行テ浴湯、カヘリテ懐紙短冊等ヲ認ム。

いつかまためぐりあハんとちぎるにも月をあるじの宿ぞうれしき

十四日。曇後ニ雨。

福本・松浦ヲハジメ泉屋徹蔵等ミナ暇乞トシテ来ル。辰時バカリ駕ニテ出立。勇哲・橋田両人付キ来ル。熊谷ヨリ人ヲ以テ送ル。銀山ヲ過グ。山中ニ町ヲナセル、ミナ銀ヲホルユエナリ。道旁右ノカタニ元就公ノ小木像ヲ安置ノ所アリ。スベテ大森ノ方ヨリ銀山ノ入口ニハ門アリ、番所アリ。坑所々ニアリ。繁昌ノ地也。但余ホド家数モ減ジタルハ、出銀スクナク不繁昌ユエナリトゾ。西田ニテ憩フ。コヽマデ大森ヨリ二里ナリ。コノ所ノ葛ノ名物アリ。殊ニ瑞泉寺トイフ真宗寺ニ製スル葛ヲ妙トス。ソレヨリ福光ヘ二里。

さやかなる月にうかれてとふ□〈字体不明〉〈傍記〉〔カ〕とミえしハつゆのそぼつ也けり

待恋

鳥ハねになけどもちらぬともし火の花やこゝろの松にさくらむ

ソレヨリ雨ニナル。山中ヲヘテ波積村ニ至ル。多田順益道マデ迎ニ出ヅ。順益隣ノ真宗願寿寺ノ隠居ニヤドス。予・勇哲・橋田右兵衛・僕ト四人也。

十五日。雨。

同家ニアリ。大祓ヲ講ズ。

十六日。晴。

大祓ヲ講ズ。

十七日。晴。

コノ辺ニテ嘱ノ短冊懐紙等ヲカク。勇哲師ノ便所ハ大国ノ安井助一郎方也。来春迄ハ安井ニ居ルヨシナリ。葛粉安井より送リ来ル筈也。安井老人ハ書翰ヲオクルニ意見ニナルコトヲ申コセト也。

安井頼ミノ画ノ二幅対

春　拾遺雑　斎院子日　順

一本の松のちとせも久しきにいつきの宮ぞおもひやらるゝ

秋　廉義公ノ家にて云々　平兼盛

千とせぞと（ママ）草村ごとに聞ゆなるこや松虫の声にハあるらん

波積の山里にて

山かげハ秋のうちよりしぐれして寒き朝けにもみぢゝるなり

ほのぐゝと岡のほこ杉霧晴てそゞろがましくもずのなきたる

安井助一郎方ノ竜岩ノ観音、紙半切ニ書キ遣ス事。并ニ安井・梶野マタ広道・春臣ヘタツ岩ノウタ申遣スコト。

十八日。晴。

払暁波積ノ多田順益清興ガ亭ヲタツ。主人一里バカリ送リ来ル。勇哲師〈傍記〉〔鵡二庵〕、江川ノ東岸マデ送リ来ル。箸ガ浜ト浜田ト二所ニテ中食。三宅ノ西田屋ニヤドル。波積ヨリ十里也。

梶野淳吉郎ヘ征韓紀原ヲオクルベキコト。

十九日。晴。

三宅ヲ立テ三隅ヲ過ギ、カマデニテ中食ス。コヽマデ五里也。ソレヨリ三里来テ高津ニヤドル。柿本社ニマウヅ。

夢結ぶあまやなからん波のおとのとハに高津の浦のとまやハ

廿日。晴。

ソレヨリ青原ノマチヲヘテ一二丁来テ商家アリ。コヽニテ中食ス。家奇麗ニテヨシ。七ツ半時比ニ津和野ノ高津屋ニ着ク。葛一升ヲ買フ。

廿一日。雨。

ツハ野ヲ立ツ。小雨ナルユエニサハラズ。石見境ヨリ下ル道ニテハヤク徳佐ヲ過ヌ。追分ト云所ニテ中食。コヽノ茶店サノミ奇麗ニモアラネド萩蒲鉾など出セリ。ソレヨリシバラク来テ、山代ノカタト宮市トノ別レ道アリ。山代ノカタナルハ大ナル道ナリ。本郷マデコヽヨリ十五里トイフ。宮市ヘハ九里半バカリナルベシ。一里半ホド来テ大原ノ紺屋ニヤドル。行サニモヤドレル家ナリ。内奇麗ニテヨシ。追分ヨリコナタハ小道ナレド、坂ナクテ歩行ヨシ。

廿二日。雨。

大原ノコンヤヲ立ツ。西浦ノ売薬師、モト山口屋ノ手代ナリシ男ヲ同伴、七ツ時比宮市小倉ニツク。今津太郎・鈴木義雄早速入来。日クレテ三田尻ニツク。荒瀬老人少々違例也。

廿三日。晴。

廿四日。晴。

廿五日。晴。

夕ガタ秋本ヘ招請。暮テ後宮市上田屋ヘ行テ孫介ニ逢フ。上田ノ三幅対ヲ為恭ヘ申遣ハス。

左　曲水　中　旭ニ若松　右　重陽

書画帖序

絵ハこゑのなきうたとしいへバ、絵もうたのどちなりけり。うたハ声のある絵としいへバ、うたも絵のどちなりけり。うたやゑやこきまぜて春秋あかぬ花もみぢのかはりになせる此一たゝみ、ちるうらみもなし、うつらふなげきもなし。あはれ老なん後までも心をなぐさむる友どちハ、またこれにしくものあらなんや。

廿六日。晴。

廿七日。晴。

潮音寺ニ於て真纏・安船ノ追悼会、今津已下集る。馬関ノ小倉〈傍記〉〔カ、関カ〕モ来ル。

廿八日。午後晴雨。

山口ニ来ル。竹谷昌右エ門ヘノ状、三田尻ヘタノミオク。荒瀬二幅対、上田三幅対等ノコト也。松田ニヤドル。

廿九日。晴。

鈴木ヘタニザク二葉オクル〈割書〉〔千家国造、同連枝ノ分〕。鶴〈傍記〉〔口〈字形不明〉鶏カ〕肉、竹谷・平塚・貫名・秋田屋ヘ送りくれ候ヤウニ添書ス。マタ福山江良ヤ千兵衛ヘ書状、鞆ノ保命酒ヤマデ遣ハス。夜亀やヘユク。

晦日。晴。

吉川殿当所泊リニ付、則今日当所滞留。片山ヘ行テソノ備ヲミル。

十〈次の「一」字見消〉月〈安政三年〉一日。晴。

出立。萩ニカヘル。途中ニテ浦賀ガヘリノ糸賀外衛・草刈等ニアフ。夜ニ入テ萩ニカヘル。早速御添状支配ヘ出ス。

二日。雨。

三日。晴。
四日。晴。
諸方へ帰着ノ見参トシテ廻ル。左山・鈴木来ル。
五日。晴。
夜坪井氏へユク。
六日。雨。
七日。晴。
八日。晴。
九日。時雨。
今日ヨリ部屋ノ庭ヲ直ス。辰蔵并ニ手間一人日庸一人来ル。今日ヨリ弥七来テ屏風ヲハル。今夜桑原弥太郎亡父ノ追悼会也。
十日。時雨。
辰蔵并ニ手間一人来ル。弥七来ル。金一両、弥七ニ遣ハス。
十一日。晴。
辰蔵并ニ手間一人、マタ弥七モ来ル。
十二日。晴。
辰蔵一人、喜介一人来ル。
十三日。晴。
〈十三日。晴。〉
辰蔵一人、并ニ手間一人、喜介一人来ル。
十四日。晴。
辰蔵并ニ手間一人。
十五日。晴。
辰蔵并ニ左助来ル。今夜上山ヘマカル。
十六日。晴。
十七日。晴。
今朝源蔵出立。今日辰蔵并ニ手間一人、喜介来ル。
十八日。晴。
辰蔵方ノ手間一人、喜介来ル。
十九日。晴。
辰蔵并ニ手間一人、喜介来ル。
廿日。雨。
同。
廿一日。寒。
同。
廿二日。晴。
廿三日。曇。
辰蔵并ニ手間一人、別ニ日庸一人、喜介一人。今日小幡会也。
廿四日。晴。
今朝黒書院講尺出勤。今日辰蔵并ニ手間一人、別ニ日庸一人、喜介一人也。
廿五日。晴。
手間一人、外ニ一人来ル。夕飯後岡本同伴ニて倉辺散歩。布施氏之墓ニマウデ、其後備前ヤガ骨董店ニ至ル。
廿六日。
辰蔵并ニ手間一人、同一人。今日敬身堂講話。
廿七日。晴曇。
辰蔵并ニ手間一人。
廿八日。晴。
辰蔵并ニ手間一人、喜介来ル。
廿九日。晴。
辰蔵等両人、喜介、左介来。
晦日。晴。
同。

十一〈「二」字を見消にして「一」と改める〉月〈安政三年〉朔日。
時々小雨。
夕方大谷へ行ク。

二日。晴。
喜介来ル。語類二十五ノ七、一巻校合畢。綱目三十三よりヨミ始ム。
三日。晴。
四日。時々雨。
大工一人、并ニ左官両人、喜介来ル。
五日。時々雨。
大工壱人、喜介来ル。
水鳥
むしぶすま冬をよそなるねざめにも寒さくまるゝ水鳥のこえ
六日。曇。
大工善一人来ル。夜大雪。
七日。晴。
雪霽テ庭前之景好シ。大工善一人来ル。
八日。晴。
九日。晴、昼後雨。
十日。風雪。
十一日。同。
十二日。晴。
今夜大道尾崎の会。此方ニて引受。
朽のこるこのはのうへに雪ふかくなごり淋しき秋しのゝ里
十三日。晴。
辰蔵其外三人来。
十四日。曇。
十五日。晴。
十六日。晴。
大道尾崎ニタノミ、広島状ヲ送ル。日記ヲオクル。
十七日。晴。
暖気甚シ。灸治。
十八日。晴。
同断。
十九日。晴。
廿日。晴。
廿一日。晴。
廿二日。晴。
洋外記聞二冊、御小納戸へ奉ル。
廿三日。晴。
廿四日。晴。
廿五日。晴。
廿六日。曇、夜小雨。
〈頭欄〉〔○〕明日明木御狩。今夜雨天ニ付、俄カニ御延引。今日瀬能方ニて小会。
名所雪
斧のおとにまがへてぞきく雪をれのひゞきこぶかきあぶの杣山
今しばし沖にたゞよへ角しまのせとこす今朝の雪のとま船
冬山家
さゑてけさミやこの夢のあとゝへバ心ミえなるやどの雪哉
木のはにもたどりわびつる山かげのいほのほそミち雪のうづめる
廿七日。
廿八日。晴。
廿九日。晴。
十二月〈安政三年〉一日。風霰。
夜ニ入て風霰益甚シ。熊谷岩吉亭ニ会ス。
二日。晴。
三日。晴。
明倫館書生中西浜練兵。
四日。晴。
西浜ニて大炮其外。

五日。晴、夜小雨。
六日。晴。
明木山御狩。山県吉之介、猪ヲウツ。
七日。朝雨。
石州安井・多田へ書状ヲ遣ハス之便ニ、火事笠并ニ常ノ笠、コヨリ細工之分ツカハス。

〈以上　第八冊〉